



目的意識を明確化した中国語教育について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-12-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 湯城, 吉信 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00007663

目的意識を明確化した中国語教育について

湯城吉信*

Chinese Education with Emphasis on the Learner's Motivation

Yoshinobu YUKI*

ABSTRACT

The most important factor in learning is the learner's motivation. However, the current arguments on education is sadly lacking in attention to that point. This paper presents several ways to motivate learners, to help them set their own goals, and to make them aware of methods with which they can attain their goals. The author also emphasizes the importance of having actual contact with Chinese language and culture, and makes them find learning materials on their own themes, in books, on the Internet, and so on.

Key Words : Chinese education, motivation.

はじめに

語学に限った話ではないが、今や、世の中には様々な教材が溢れ、CD、コンピュータなど教育機器も発達している。勉強する条件が今ほど恵まれた世の中にはないであろう。また、教育談義が盛んに行われ、学校はカリキュラム改革に忙しい。

以上のような時代にありながら、日本人は相変わらず英語、特に会話力に劣るとされる。まして況や他の外国語をやである。大学の第2外国語を履修したと言ってもほとんど何も身につけていないのがほとんどの学生の現状であろう。それでは、条件に恵まれ、また外国語習得に少なからぬ投資をしている日本人がこのような状況に陥っているのはなぜか。

その理由は、教育に一番大切な要素である、その勉強に対するやる気が欠如しているからであると私は考える。学生が悪いのか、教師が悪いのか知らないが、ともかく、やる気がなければ、いくら客観的条件が整っていて、時間を費やしても、その効果はない。否、そのような勉強を繰り返すことはマイナス効果を生むことさえある（この点、教師は肝に銘じるべきであろう）。

教育談義、カリキュラム改革などが現実離れた単なる理論に陥りがちなのは、以上のような「やる気の欠如」を蚊帳の外に出して議論しているからであろう。

教師の学生観は様々だが、私は以下のような考えを持っている。すなわち、学生はやる気を出すこともあれば出さないこともある。やる気が出ればやるが出なければいくら強制的に座らせたり、黙らせたり（静かに勉強するふりをさせたり）しても、何ら効果はない。この当たり前の認識の下、授業に臨みたいと考えている。

前置きが長くなったが、以下は、私が以上のような基本認識の下に平成14年度、4年一般選択授業の「言語と文化」で行った中国語教育の実践記録である。キーワードは1つ、やる気と目的意識とを高めること、これだけである。

1. 前期授業一やる気・目標の喚起、目標達成への方法の意識

履修学生は21名であった。この学年は、1年の時、1クラス担当しただけであったが、その担当したクラスの学生が半数を占めた。中国語は5年の選択科目にもあり、両者を重複して履修することは認めないとしたのでこの数に抑えられた。また、過去に担当している学生が多ければ、さらに増えた可能性は高い。

(1) まず実物に触れる

第1回目の授業では、まず最初に中国語のCDを聞かせ、中国語の本、新聞を見せた。実物に触れての第一印象が大事だからである（この実物の重視という点

2004年4月14日受理

*一般教養科 (Department of Liberal Arts)

は後期の中心とした。後文参照)。そして、その印象をブレインストーミングで出させた。反応はさまざまである。音については、可笑しいと言って笑う学生もいるし、文章については「漢字ばかりだ」「日本の漢字と違う」など当たり前の反応も多い。出た反応については、「どうして可笑しいと思うのか(発音のどういう特徴からか。君はフランス語を聞いても笑うか)」とか、「漢字ばかりの文章だとは限らない」と言って注音符号(中華民国時代に作られた発音記号。片仮名を参考に作られた。今は台湾のみで使用)を見せたりする。その上で、**中国語の特徴**について一応のガイダンスをする。

(2) 目的の明確化

次に、**選択理由**を尋ねた。結果は、21名中15人ぐらいは「中国語に興味がある」という積極的理由による履修であった。残りの6名ほどが、「他にやりたいものがなかった」「単位が取りやすそうだった」「友達が取るので」「先生でなんとなく」など消極的理由による履修であった(担当教員で選ぶのは授業自体に対しては積極的理由だと思うが、中国語を主体に考えた場合は消極的理由に入れるべきであろう)。

以上の中、積極的理由を持っている学生については基本的には問題はない。ただ、やる気がある学生も目的意識は不明確であることが多い。すなわち、語学が好きだと言っても語学の勉強(一般に行われている外国語学習の形態)が好きだとか、何となく外国にあこがれている場合が多い。目標を聞いても、「話せるようになりたい」という漠然としたり、理想が高すぎる場合が多い。以上のような学生に対して、私はより**本質的で現実的な回答**を求めた。後者について言うと、「1年で話せるようになると思うの」とか「何をどの程度話せるようになりたいの」などである(注1)。以上のような問いに即答できる学生はいなかったが、ともかく以上のような問題を認識させ、自分なりに答えを導き出させることが重要であると考えた。

さて、問題なのは消極的理由で取った学生に対する対処法である。

私は「単位のために取っても何の意味もない。むしろ、自分にとってマイナスだ」ということを強調する。そして、目的意識を持っていない学生には、必ず目標を設定させる(ただし、この一年で達成可能なレベル)。ただし、結果的に効果があったとは言い難い(このような学生に対する対処法は、彼らの目的である「単位」がその目的とならないように根本的に制度改革するしかないであろう)。なお、各自の目標は第1回目の授

業の最後にまとめて提出させた。

(3) 目的に合った方法を意識する一授業パターンの確立

学生が提出した目的は、「会話ができるようになりたい」というのが多かった。それは、もともとシラバスに書いている授業目標だからだ(教材は、白水社の『1年生のコミュニケーション中国語』という本で、日本人が中国を訪れた際の会話が場面に分けて載せてある)。

以上の目的の後にするのは、方法の話である。

まず、「君たちはどうして英会話が苦手なのか」と問う。これに対しては、「日本語が英語と違い過ぎるためだ」とか「日本の教育が文法に偏っているからだ」とかいう答えが返ってくる。「会話はその国に行かなければできるようにならない(逆に、その国で暮らささえすればできるようになる)」という考えの学生もいる。これらに対して、私は反例を挙げて反駁する。どれも一概に言えないからである。

私は一般論をしても意味がないと考える。一般論を引いてきてそれを自分に当てはめることは自分の無能を正当化する行為である。そのようなことをしていても進歩は期待できない。すべきことは、**自分がなぜできないのかその具体的理由を明らかにし、その具体的克服方法を自ら考えること**である。ただし付け加えると、その前提として、自らの実力を見極められることが必要である。

また、重要なのは、語学は特殊能力ではないので、誰でも一定の水準には到達可能であることを納得させることである。

以上で、外国語学習の方法について説明する素地はできた。そこで以下のようなプリントを配る。

・・・学生に配ったプリント内容・・・
中国語授業の進め方

以下、各課本文は次のような手順で練習します。各練習とする目的と意識すること。

(自分で練習する時も、「目的」と意識し、その目的にあった練習とする。)

<本文基本練習> 教科書を見ながら

・続けて発音(正確な発音ができるように) 全員で
・役割練習(発音と意味と一致させる一なりきって) 全員で、2人ペアで、模擬演技

・もう一度全体で(なりきって)

<マスターのための練習> 教科書と同じで

- ・中国語→中国語(発音の完全習得)
- ・中国語→日本語(聞いて分かる)
- ・役割練習
- ・日本語→中国語(自分で言う)
- ・・・・プリントの内容ここまで・・・

個々の練習については一般的なものかもしれない。ただ、練習の目的を意識することを強調する。そして、「先生次何するのですか」という質問が出ないように、学生に授業の進め方(パターン)を理解させる(注2)。知らず知らずの間に外国語を身に付けることができるのはせいぜい小学生までであろう。大学生の年齢になれば今何をしているのかを意識しなければ勉強を身に付けることはできない。

そして、学校で身に付けるべきいちばん大切なものは自己学習力の養成であると強調する。何かを身に付けようとする場合、自分のことをよくわかって自分に合わせた指導をしてくれるコーチの指導を仰ぐことがベストであろう(一流のスポーツ選手のように)。だが、現実の学校では教師は人数の関係上、個々の学生のコーチにはなれない。このような状況では、自分が自分のコーチにならざるを得ない。ただ、このような環境をマイナスに考えるのではなく、積極的に活用すべきである。自己学習力を身につけられれば一生の財産になるからだ。

なお、上記の練習は、発音と意味を一致させることと、それを反射的にできるような回路を脳に作ることをその最終目的とすることを言うておく。

(4) 参考一通訳のトレーニング方法

以上のような「目的を意識した学習方法」を採用するに至ったのには、以下のような個人的理由がある。それは、自分の中国語能力の頭打ちである。日本語の環境にいながら、しかも大学生になってから始めて、外国語をマスターするのは簡単なことではない。私の中国語の場合、日本人の常として、読解については早くに問題ないレベルに到達することができたが、聴力と会話能力についてはある水準で伸び悩んだ。よく、聴力を高める学習方法として、多く聴けとか、シャワーのようにその言葉を浴びるとか言われるが、いくら聴いても分からないものは分からないのである(先に述べたように、ある年齢以上になって「自然に」外国

語をマスターすることは不可能である)。

そうした状態の時、通訳のトレーニング法を知り目が開かれた。それは、同じ教材(文章、テープ)でも様々なトレーニングができること、また目的にあったトレーニング法があることである。それまでは、中国語の文章を読むにしても聞くにしても、ただ漫然と読んだり聞いたりしかしておらず、それを利用してトレーニングするという観点がなかった。例えば、次のようなトレーニング法がある。「→」はそのトレーニングの目的、得られる効果を表す。

<テープのみ>

1, シャドーイング・・・外国語と聴きながらほぼ同時に繰り返す(意味が分からなくても、追いつかなくても、とにかく付いて発音するように努力する)。

→その言葉の発音に慣れるためのトレーニング法。

2, サマリング・・・聴いた外国語の概要と述べる。メモは自由。日本語でする場合と外国語でする場合とある。

→意味と把握する練習。

*分かる点と生かし、いかにわからない点と克服できるかがポイント。

3, 一文ずつリピート

→1の個別版

4, 一文ずつ日本語に訳す

→2の個別版

<原稿(活字)と配って>

5, 外国語原稿を見ながらテープ(外国語)を聴いてオーバーラッピング(同時に繰り返す)。

→発音と文字の一致

6, 日本語原稿を見ながらテープ(外国語)を聴いて日本語と読む。

→同時通訳(外国語→日本語)のシミュレーション

7, 外国語原稿を見ながらテープ(日本語)を聴いて外国語と読む。

→同時通訳(日本語→外国語)のシミュレーション

<再び原稿を見ずに>

8, 外国語を聴いて、同時に日本語と言う。

→より実際に近い同時通訳(外国語→日本語)のシミュレーション

9, 日本語を聴いて、同時に外国語と言う。

→より実際に近い同時通訳(日本語→外国語)のシミュレーション

以上の1~9は、ほぼ同時通訳への階梯と言っても

よい。別の言い方をすれば、この各段階をこなすことができなければ同時通訳はできないということである。もっとも、通訳とは特殊な能力であり、学校教育で全員が目指すべきものでもない。また、普通に外国語を勉強する目的は、「日本語 \leftrightarrow 外国語」の変換を自在にすることではなく、「意味 \leftrightarrow 外国語」の変換（結びつけること）である。外国語を操る上で、日本語を介在することはむしろマイナスになるとも言える。ただ、「意味」を考える場合、多くの場合母語で考えざるを得ないことからすると、「意味（日本語） \leftrightarrow 外国語」とも言える。少なくとも、先に述べた通訳トレーニングを外国語をマスターする過程のモデルとして使えることは確かだろう。

すなわち、**1～9の階梯はほぼそのまま、人が外国語を処理する過程、マスターする過程**に対応していると言うことができる。すなわち、外国語を聞いた場合、まず、音を認識できることと大意をつかめることが大事である。大意をつかめれば芋蔓式に意味を引き出していくことができるし、音を認識することができれば（注3）、それを復唱し、相手にその意味を確かめることもできる。それに対応するのが上記の1と2とである。外国語を聞いた場合、100%聞き取れるレベルになることは不可能に近い。その中で、重要なのは、**わからないものに対処できるかどうか（わかる方向に持っていけるかどうか）**である。その能力を養うために、1～4は非常に重要である。

（5）実際の運用

さて、本題に戻る。実際の授業では、先に載せたプリントや通訳トレーニングのパターンをそのまま使うことはしなかった。同じパターンを律儀に繰り返していると学生がだれるからである。

ただ、**最初に「その課の絵（課文に対応した絵がある）を見て、内容を推測させること」「シャドーイング」「わかったところの確認」**は必ず行った。すなわち、**初めてわからない外国語に接した時にどのように対処するかという練習**である。これは、普通の学校の外国語授業では、あまり行われていない作業であろう。普通、学校の授業では、原稿（教科書）があらかじめ与えられて、それをリピートしたり、日本語に訳したりすることしかしない。そのため、当初、学生は以上の作業がほとんどできなかった。不可能だと匙を投げたがる学生もいた。だが、「**実際の会話で原稿が与えられていることがあるか**」とか「**できないと言っていたらいつまで経ってもできない**」とか言って重要性を強調し、とにかくパターンとして実施した。そして、

これは私も経験しているが、トレーニングを積み重ねれば徐々にできるようになった。

その他、必ず行ったのは、仕上げレベルでの、**2人ペアによる会話実演（暗誦）**である。これは、**マスターするための練習**である。ことばは「わかる」だけではだめで「使える」ようにならなければならない。2人で実演できることを各課の目標に定め、そのために自ら取り組ませた。なお、意味を理解せずに行っても無駄なので、実演中に割り込んで意味を聞くこともある。詰まった学生には、文脈（意味）を伝えることでヒントにする。**できれば授業を終われる**ということは学生にとって非常に魅力的なことなので（特に昼食前は）、非常に有効なやり方であった。

また、**関門**と称して、数課ごとに（年に3回）個別テストを行った。この各**関門をクリアしなければ単位は認めない**と言った。クリア基準は7割である。テストはきわめて単純で、第1回目は正確に発音できるかどうかを試し、2回目以降は「日本語→中国語」「中国語→日本語」の変換をさせた。1人ずつするので、問題はアトランダムに出す。これも、授業の目標を生む上で定期テストより有効なやり方であった（ただし、40人クラスでは無理であろう）。

なお、**定期テスト**も極めて単純なものである。ヒアリングは「中国語を書き取る（音の把握）」「日本語に訳す（意味の理解）」、リーディングは「中国語を日本語に訳す（理解）」「日本語を中国語にする（表現）」4つである。経験から言って、**語学のテストは単純なほどよい**。複雑になればクイズに堕し、コミュニケーションの本質から離れるからである。

（6）夏休み課題—自己表現、実物（文化）に触れる

また、夏休みには中国語で**400字の作文と中国紹介**（自分でテーマを探す、日本語でよい、9月に発表）を課した。作文はいきなり無理だと学生は言い、自分でも無謀な気もしたが、「自己表現のため」という目標を意識させるために行った。結果は、思ったよりもできていた。ただ、この宿題を出すまでに以下のような作業を行い学生の**表現に対する意識の向上**は図っている。

例えば、「我 要～（私は～がほしい／したい）」という表現が出てきた場合のことである。これはテキストでも、日本人が中国で買い物をする場面になっているのだが、テキストで出てきている品物以外に、例えば、「石鹸がほしいと言ってみろ」と言う。すると学生は「石鹸はどういうのか知りません（習っていません）」と言う。それに対し、「**外国語を話す場合には、**

わからないことをいかに表現するかがポイントなのだ」と言い、石鹸に当たる中国語を知らない場合、どう伝えればいいか考えさせる。すると、「英語で言う（「我要 soap」）」「身振りを使う（石鹸を使っている動作）」などが出てくる。それに私が足すのは「筆談（日本語の漢字で書く）」と「日本語で言う（「我要せけん」）」である。日本語の漢字がそのまま通用しない場合も多い（石鹸は通じない）が、通用する場合もある。日本語の単語をそのまま使うのは当然通じない場合がほとんどであるが、可能性としては通じる場合もある。例えば、豆腐は標準中国語の発音でも日本語のそれに非常に近いし、中国には方言が多いので、標準中国語の発音では日本語の発音と全く違う場合でも特に南方の方言では、日本語の発音に非常に近い場合があるのである。要は、**可能性があれば何でもしてみろ**というのが、表現の鉄則である。それを普通の授業の時から意識させるのである（注4）。

中国についての紹介は、「実物」から遠ざからないようにという狙いからである。結果は、インターネットで見つけた誰かの見聞録をそのまま引いてくるなど、根拠という面で問題があるものがいくつかあった。全体に本やインターネットからの孫引きが多い中、山口県の田舎で楊貴妃を祀っている神社を発見したことを報告したレポート（以下、Yさんのレポート）は出色であった。夏の課題はレポート提出後、各自に発表させた。以下は、発表後、学生に配ったプリントの内容である。

……学生に配ったプリント……
言語と文化2 夏休みの宿題について

<中国紹介について>

1, Yさんの発表（楊貴妃伝説）の参考

日本の有名人が中国に行ったという話もある。例えば、源義経（1159～89）が死なずに、中国に行ってジンギスカン（1206～27）になった、など。義経ファンのねつ造だろうが、知っておくと、時代の対応と覚えるには便利。

2, O君の発表（二胡）の参考

「胡」のつくものはすべて西から……胡椒、胡瓜（きゅうり）、胡麻（ごま）など。

中国語の楽器名—中国語の方がわかりやすい？

ピアノ（鋼琴）、チェロ（大提琴）、ダブルベース（低音提琴）、ビオラ（中提琴）、バイオリン（小提琴）、

チューバ（大号）、トランペット（小号）、ホルン（圓号）、トライアングル（三角鈴）、ハーブ（豎琴）、フルート（長笛）、ピッコロ（短笛）

<中国語作文について>

—やりっ放しで終わらないために

君たちの今の中国語の知識では、複雑な内容を正確な中国語で表現することはもとより不可能である。それにも関わらず、このような宿題と課したのは、伝えたいことを表現できる、これが重要だからである。正確かどうかは二の次である。

結果は、すでに提出してくれた分は、なかなかよくできていた。中国人にもほぼ内容が伝わるようにできていたからだ（やはり、漢字を知っているということは大い）。

ただ、当然間違いは多い。次にすべきことは、間違いを認識して直すことだ。私の添削をよく理解して（わからなければ聞きに来る）、もう一度、書き直すこと。その際、大事なのは、こういう内容はこのように表現するのだと意識して、以後自分が使えるようにすること。

まとめ：表現のためのステップ

その1、自分の頭にある内容とともかく表現できる（正確かどうかはまったく関係ない）。

*教科書の用例とばらばらにつなぎ合わせただけの人はこれができていない。

（ポイント）固太さ（間違いを恐れず、笑われても平気）

その2、間違いを認識して直す。

（ポイント）謙虚さ

その3、直したものを自分のものに吸収する（頭の中にストックして、使いたいとき使えるようにできる）。

（ポイント）意味と内容の一致（脳に回路を作れるかどうか）。

*英語でも、以上の1～3のステップをクリアできますか。反省してみてください。

……プリントの内容ここまで……

2, 後期授業—実際の中国語に触れる。自分の言いたいことを表現する。

後期も基本的な授業パターンは前期と同様である。教科書を終え、基本会話をマスターする（正確に発音できることが前提）のが目標である。関門、定期テストも前期と同じである。ただ、**実物に近づく**ことをポ

イントに、以下のような内容を織り交ぜた。

(1) 諺一順番に発表

中国語の諺をほぼ人数分用意し、順番に自分の好きなものを選んで、

- 1、意味の解説（訓読できれば訓読する。日本語の諺で対応するものがあればそれを紹介する。）
- 2、実例の紹介（実際、こういう場合がそれに当たる）をさせた。

実は同様のことは、国語の故事成語の単元でもするし、4年生の「言語と文化」で「漢文」を行った際にも行ったことがある（注5）。

これは様々な面ですぐれた教材である。漢字の意味を考えるよい練習になるし（語学的理由）、諺は民族の智慧が凝縮されたものなので文化理解のいい教材にもなる（文化的理由）。それに加えて、中国語の授業でも取り上げたのは、**成語や諺は、中国語を聞く場合、聞き取りにくいポイントの1つである**という理由がある（注6）。初級の段階ではあまり意識すべきことではないかもしれないが、成語、諺の素養は、中国語を学習する場合、克服すべきポイントの1つであると考ええる。

(2) 中国語作文—自己表現

上述のプリント内容で述べたように、夏の宿題で作った作文を添削し、正しい中国語に直したものを、清書（興味のある学生には中国語ワープロソフトを紹介）させ、10月に暗誦させた。これも1つの関門としたが、ポイントの1つは正確に発音できることである。中国語の発音は日本人には難しく、急に身に付くものではないので、常に矯正していくことが大切であると考ええる。

(3) ダヴィッドの手紙—実際の中国語に挑戦

ダヴィッドとは私が北京で知り合ったチェコ人である。知り合った当時は留学生だったが今はチェコの大学で中国学、中国語を教えている。日本に来た時も私は家に泊めて世話しているのでかなり親しい。彼と私の間のコミュニケーションは、時々英語を使うことはある以外は一切中国語である。

お互いの第2言語でコミュニケーションを取ることはその言葉の非常にいい練習になる。まず、ネイティブスピーカーに対するコンプレックスを感じなくてもよい。その言葉は一般にネイティブの方ができ（実は

そうでない場合もあるのだが）、ネイティブの言葉を基準にノンネイティブの言葉が裁かれる（端的に言えば笑われる）。ネイティブに対し、「我々は母語を異にする者同士のコミュニケーションのために、この言語を採用しているので、あなたも歩み寄りを見せるべきだ」と言ってもまず通用しない（例えば、日本人でも「日本に来たら外国人も日本語をしゃべるべきだ」とか、外国人に対して「日本語がうまい/下手ですね」という人が多いが、その人の発想は基本的に以上のような自分中心主義である）。ネイティブと言われる人間には「国際共通語」としてその言葉を採用しているという感覚はなきに等しい。

それに対し、**ノンネイティブ同士の会話では以上のようなコンプレックスはなく対等の立場である**。お互いのコミュニケーションのためにその言葉を採用しているのだということは言うまでもない。また、**理解しやすい**（ただし、お互い母語の干渉を受けるので注意は必要）し、自分の参考になることが多い。例えば、限られた語彙、表現パターンをフル活用し言いたいことを見事に表現していること、自分は知らない語彙、表現を使いこなしていることなど、ライヴアルの優れたパフォーマンスに触れることは**非常に大きな刺激になる**。私とダヴィッドはそのような仲である。

さて、教材で使った手紙は、私が彼に、娘の写真と彼の研究に関する本とを送ったことに対する彼のお礼の手紙である。中には、私の娘のどっちが自分のタイプだとか、自分のガールフレンドのことを思い出すと涎が出るとか、くだけた内容も含まれている。

学生に対しては、手紙の状況を説明した上で、2人1組で解読させた。結果は、様々な珍訳があったが、できる学生はかなりできていた。私は珍訳を出せる学生は評価する（別に点をやるわけではないが）。

とにかくイメージを作り出すことができる学生は、**対策が取りやすい。正解とのずれがどうして生じたのかを考え、それを修正すればよいからである**。また、ずれが大きい学生は正解を知った時にインパクトも大きいので、より大きな学習効果が見込める。

問題は、全く何も思いつかない学生である。これは、興味を感じないということがいちばんの問題であろう。教材が合わなかったということだ。ただ、教師が押しつける教材では、こういう事態は避けがたく起こる（教師が操作できるのはその割合を少なくすることだけである）。次に述べるように、自ら教材を選ばせるゆえんである。

(4) 中国語を探してきて発表（冬休み明け）

冬休みの課題は、あるテーマを決めて中国語を調べさせた。これは作業自体は難しくない。辞書、中国語の教材でも関連語彙をまとめている箇所は多いし、インターネットでもいろいろ見つかる。課題を説明する際に例として用いたのは、

- 1, 当時問題になっていた中国製のやせ薬の名前(「華北瘦美」「蜀宝」「緋之素膠丸」)
- 2, コンピュータ用語(朝日新聞 2002.6.8「中台造語知恵比べ」)
- 3, 日本の流行語、新現象の中国語訳(「顔グロ」「ジベタリアン」など)(注7)

である。

授業名は「言語と文化」であり、夏の宿題はその文化に焦点を当て、冬の宿題は言語に焦点を当てたと言える(実際問題としては、夏の段階では中国語が扱えないので冬になった)。

学生のレポートは、国名、企業名、外国映画(アメリカ、日本)の題名、コンピュータ用語、西洋楽器名など外来語系統が多かった。その他、飲食物についてのレポートもいくつかあった。これは、夏の宿題と同じく、レポート以外に発表を課した(レジュメも用意する)。発表では単語で10語程度の提出にとどめさせた。なお、発表後、各発表から2つを基準に、覚えておくと役に立ちそうなものを皆で選んで試験範囲とした。これは、発表を活性化させる上で役に立った。

(5) 中国文化を体験する

その他、中国文化を体験させるために、太極拳と餃子作りとを行った(後者は自由参加の課外活動、参加者13名)。教科書を読む授業とは違うインパクトを与えるには効果的であったと言える。

3. 今後の展望

私が実践した内容は以上である。以下、以上の経験を踏まえ、今後可能性のある教材、授業方法について若干述べておきたい。

(1) 科学実験、料理実習一記号を行動にする

ドイツ語の授業(武藤先生担当)で、1課が1つの実験(と言っても簡単にできるもの)を述べた教科書を用い、1課(1実験)に1グループを割り当て、順番に実験させるということが試みられたことがある。これは、**言葉という記号を行動という実物に変える作業**であり、言葉の意味を実感させようとする試みとし

て評価できよう(ただし、実態として、「ドイツ語→日本語→行動」というふうになれば意味がないが)。このドイツ語の授業に啓発され、私が集めた教材として、中国語で書かれた実験の本(実は日本のガリレオ工房の実験の訳)、集団ゲームの仕方を書いた本がある(注8)。私が思うのは、簡単なものを、いきなりその場で解説、実演させるのが有効なのではないかと思う。

その他、**中国料理のレシピを解説させ、実際作らせてみる**のもおもしろい方法だと思う。ある大学の韓国語の授業で、韓国料理を1つ実際に作り、それを写真入りのレポートにまとめて報告させるという試みがされているのを聞いたことがある。これは、学校で行うのは設備的に難しいが、料理を作らせてみるのは、その文化を体験するのにも有効な方法であろう。中国語のレシピを使うかどうか、どのように報告させるかについては、状況に合わせていろいろな方法が考えられるであろう。

(2) 時事問題の記事一実物、別の視点に触れる

2003年12月4日、サッカーの日中戦があった。結果は、日本が2-0で完勝した。日本では韓国戦は大きな話題となるが、中国戦はあまり話題にならない。だが、中国でもサッカーはもっとも盛んなスポーツだと言えるし、また、日本に負けることを快く思わない国民性もあり、多くの中国サッカーファンにとって今回の日本戦は大きな関心事であったと言える。また、中国には優秀な選手のたくさんいるはずなのにどうして今回のような完敗に終わったのかという個人的疑問もあり、試合の翌日インターネットで中国のサイトを検索してみた。結果、中国のサッカーファン(足球迷)の熱い思いがぶちまけられていた。以前韓国が日本に負けた時も同じような論調の記事があったが、「昔は戦争でやられ、今回はサッカーでやられた」という内容の投稿もある。その他、「中国の男はなんとなさけないのだ」という女性の嘆き(中国のスポーツはなぜか女子が強い)や、代表選考の問題点を指摘する内容もあった。以上のような内容は日本の新聞、URLでは見つからない。

以上のような、**中国に関わる時事問題を中国側の視点でとらえたものは、生きた中国語の材料として最適**であろう。「別の視点」があり得ることを実感させることは、異文化教育の根幹である。また、時事問題に触れることは語彙を増やす(習得する)のにも役立つ。

2002年7月の「図書館だより」でも述べたことがあるが、現在、私のほとんど唯一の中国語学習法は、

毎日午後1時から10分間放送されているNHK第2の中国語ニュースを聞ける時に聞くことである。これは日本のニュースであり（故に「別の視点」を体験することには役立たない）内容はだいたい知っているので理解しやすく、中国語の言い方を確認するのに役立つ。例えば、鳥インフルエンザが問題になった時は、「Qinliugan（禽流感）」という語を聞き、このように言うのかと確認できる。漢字がわからなければ、とらえた発音を手がかりに辞書を引けばよい。先に述べたように、発音をとらえられるかどうかは非常に重要な能力である。

おわりに

以上、やる気・目的の喚起、目的に応じた方法の意識（自己学習力の養成）、各授業での目的の設定（授業運営）、実際の中国語を理解・表現する必要性の設定（これもやる気・目的の喚起につながる）について述べた。結果は、概ね学生の満足度も高く、効果も上げられたと思う（評点10の学生が2名出た。この評点は私は他の授業では出したことはない）。ただ、2名不合格者も出た。この2名については、やる気、目的の喚起という授業目標を達成できなかったと言わざるをえない。

本稿では触れなかったが、私は学生が授業を選べることは非常に重要だと考えている。主体的に取り組む第一歩は自分で授業を選択できることだと考えるからである。選択制になっても、学生が単位獲得のために楽なものを選べば意味がないという反論もある（先に述べた2名はその例かもしれない）。だが、それは「学生が授業を選ぶこと」自体を否定する理由にはならない。

本校のカリキュラムは、いかなる技術者にも必要なものをすべての学生に身に付けさせるべきだという考えの下、必修科目を一律に受けさせる方向にある。「いかなる技術者にも必要なもの」については、私は一般教養については特定科目がそれだとは言えないと考える。私が考える必要なもの、いちばん大切なものとは、「自己認識し、目標を持ち、それを達成する」というプロセスを実体験すること、そして、将来新しい事態が生じた場合対処できる力を身に付けることである（その意味では、来年度から始まる3年生の特別研究には大いに期待している）。本稿は、それを中国語で試みた実践報告である。蛇足ながら付け加えると、本稿で紹介した方法は、選択制で、21人という少人数であったから可能であった。必修40人では絶対に無理である。

注

(1) 語学教育が目的を絞るべきことは、鈴木孝夫『日本人はなぜ英語ができないか』（岩波新書、1999）も主張する。特に、126頁を参照されたい。

(2) 授業のパターン化（進行手順）については、遠藤光暁『話す中国語 基礎篇』教授用資料（朝日出版社、1998）でも述べられている。同書では特に、入れ替え練習（パターンプラクティス）に練習の重点を置いている。

(3) 言語学者の身に付けるべき能力として、どのような言語でも、国際音声記号（万国音標文字）で書き写せるということがあるらしい。

(4) 逆に、聞く場合にもわからないものいかに対処するかが問題になる。これについては、上述の通訳トレーニングの2がそれに当たる。最初にテープを聞いた際、わかる所から分からないところを克服する練習をするということである。

(5) 拙稿「一般教育としての漢文演習—漢文教育の意義再考」（『新しい漢字漢文教育』29号、全国漢文教育学会、1999）参照。

(6) 他に聞き取りにくいポイントとして、外来語の翻訳がある。

(7) 陳美如『超 I N 日本流行語』（万里機構、2001）

(8) 『随手可做有趣的科学実験』I、II（世茂、2002）『学生野外趣味遊戯』（益群書店、1990）